歴　史（第3日曜日掲載）

bunka@nagasaki-np.co.jp

すべてが平等な理想の地

開港450年
長崎の遠い記憶
⑩ 最初の町、最初の人々

増崎英明

今から450年前の1571年春、長崎の岬では六つの町が造成中でした。今の県庁跡地（江戸町）から万才町へ続く高台は当時、やぶに覆われた雑木林でした。キリシタン大名で領主の大村氏と、親戚の有馬氏はイエズス会と相談の上、長崎を南蛮貿易の拠点とすべく、樹木を切り倒して町を建て始めます。

■要塞として

まず縦横に道を通して土地を六つに区画し、道路沿いに家を建てました。資材は伐採した樹木を使ったと思います。三方を海に囲まれた地形は、マカオやマニラなど当時の南蛮人が造った要塞に似ています。おそらく長崎も、教会と住民のための防御施設だったことでしょう。

海に守られていない内陸には、大村氏の関係者が住む「大村町」と、有馬氏の「島原町」を据え守備隊を配備しています。岬の先端にイエズス会の小さな教会を建て、半島の海側に「横瀬浦町」と「平戸町」、山側に「外浦町」と「ぶんち町」を拓くと、6町全体を石垣と堀で囲んで外界から遮断しました。

同年の夏、マカオから生糸などを積んだ最初の宝船（南蛮船）が入港します。今なら大企業を誘致した感覚でしょう。新たな雇用が生まれ、日本各地から商人や多くの労働者が流入しました。長崎は国際貿易都市として最初の一歩を踏み出したのです。

長崎に最初に住んだ人たちは、何処から来たどんな人だったのでしょう。少し後の調査（長崎平戸町人別帳）によると、地元出身は少なく、半数以上は外からの流入者でした。キリシタンの亡命者もあれば、仕事を求める放浪者もあったでしょう。高麗（朝鮮）、堺、京都など遠隔地の人も1割ほど交じっていたようです。

■人種のるつぼ

この頃の長崎の特徴は、第一に全住人がキリシタンだったこと、第二は人種のるつぼだったことです。マカオから船が入ると、南蛮人、中国人、アフリカ系やインド系の黒人、東南アジア人など世界各地の人が下船し、長崎の町には多様な言語が飛び交ったはずです。当時の町と人の様子は「南蛮屏風」の中に描かれています。長崎はかまびすしくも活気あふれる町だったことでしょう。

未開で無人の何もない場所に、新しく人工の町を作り出す作業は、アメリカ開拓時代のような夢と希望にあふれていたはずです。一方で、その後の町の発展は悪徳や闘争、貧富の差や立場の上下を生み出していきます。差別の生まれる種は、おそらく町建ての最初からあったのです。古書には、大村純忠やイエズス会と交渉した住民代表の名前（高木、後藤、高島、町田など）が記録されています。彼らは後に町の実質の支配者になるのです。

しかし、少なくとも始まりの頃の長崎は、住民のすべてが平等な理想の町だったのではないでしょうか。

（前長崎大付属図書館長）

南蛮屏風に描かれた南蛮人ら（長崎歴史文化博物館蔵「南蛮人来朝之図」の一部）

時代に合わせて泳いでいく

インタビュー

元長崎市立博物館長

原田博二さん

原田氏（右）にインタビューする増崎氏
＝長崎新聞社（山下哲嗣撮影）

―キリシタン関係のものは江戸時代にほとんど破壊されていますが、南蛮屏風はたくさん残っている。なぜだろう？

秘蔵、隠匿されていた。見つかったら大名家もつぶされたはずだ。それらが明治以降に世に出てきた。

―南蛮屏風には南蛮人と一般の日本人が一緒に描かれている。日本人はどんな人が住んでいたのだろう。

商人としては堺、京都、大阪、博多などから、長崎で大もうけしようという者が集まり住み着いた。末次平蔵（博多の商人の子で移住後、江戸初期の長崎代官となった商人）が代表的。一方で高木、高島、後藤、町田といった後の「町年寄」は元々は武士クラスだろう。長崎で一旗揚げようとやってきて、腕っ節が強いことから「頭人」（住民代表）に選ばれ、地位を得て貿易を始めたのだろう。

―一般の人々はどうやって生計を立てたか。

商人は別として、深堀や諫早の農民らが長崎に逃げ込み、力仕事や荷役で賃金をもらった。やがて町人として成り上がった者もいただろう。

―長崎人の性格はどんなものだと思うか。おまつりが好きだ。

長崎の祭りは幕府からやらされたもの。「長崎くんち」は特にそうだ。幕府の威光を宣伝する方便だったが、そういう中でも自分たちでやりたいという動きがあった。そうした意味で、くんちは「やりたい人、出たい人」の祭り。お金がある人は幕府に内緒でいろんなことをやっていて、ある意味のレジスタンス（抵抗運動）だった。

ただ、いつも思うのは、どんな小さな城下町でも、お城があれば一つの文化ができたはずだが、長崎にはそれがない。一つにまとまるためのお城がなかったから、（長崎の人は）その時代時代に合わせて、うまく泳いでいけるようになったのかもしれない。

―長崎で今後、残していくべき遺産は。

まずは、ちゃんとした研究機関を作らなければいけない。そこで残すべきものを決めて集めていく。長崎大が中心になって結集していくべきだ。南蛮時代の中心「岬の教会」があった県庁跡地や中島川の石橋、出島、唐人屋敷、居留地…。今あるものは残していきたい。

後は長崎くんち。例えば山車だけなら世界遺産になり得るが、あまりにも総合的すぎて全体では当てはまらない。だが県市が中心となり、しっかりした報告書を作れば可能性はあるはずだ。

（聞き手は増崎英明氏）

コラム　消えてしまった松

今回インタビューした原田博二氏によると、南蛮屏風は豊臣秀吉が現在の唐津市に築城した名護屋城の内部を飾るため、京都から連れてきた絵師らが描いたそうです。金泥（金粉をにかわで溶いた顔料）の絢爛豪華な画風からは、派手好みの秀吉がほうふつとします。長崎を実見して描いた絵師もいたようで、当時の〝写真〟として眺めるのも一興ではないでしょうか。

ナウ（黒船）の来航、カピタンモール（司令官）の上陸、傘を差し掛ける黒人、教会で待ち受ける黒衣のイエズス会士、はだしのフランシスコ会士、アラビア馬のポルトガル商人、出店で取引をする日本人、象、洋犬、ジャコウネコ…。南蛮屏風にはお決まりの題材があり、主観的には日本人が驚きをもって見たものを表現しているようです。

一方、客観的に見れば、出島に閉じ込められる以前の南蛮人と日本人との平たい交流が見て取れます。彼らは互いの国の言葉であいさつを交わしたことでしょう。南蛮人と日本人には1世紀にわたる付き合いがあり、長崎はまさしく「国際貿易都市」でした。そのことが一目で理解できます。

ひとつ気になるのは、描かれている樹木に「松」が多いことです。今の長崎の古木はクスノキが主で古い松は見かけません。海辺に育つ松は、海岸沿いの埋め立てとともに消えていったのではないでしょうか。